

会話中にあらわれる文末詞シ

要旨

本稿では、主に若者の会話中で用いられる文末詞シの用法と意味機能を、実際の使用例を広く観察した上で考察した。

まず、シを付加できる構文は限られている。また、シが用いられるためには、文脈についての制限もある。ポイントは、会話で扱う事柄に関しての、聞き手と話し手の持つ情報の一致・不一致(有無)を、話し手がどう認識しているか、実際の聞き手の言動が、その情報にそったものであるか、話し手がマイナスの感情を持っているかという3点で、それぞれの組み合わせにより、シを用いることができるかどうかが決まる。

また、文末詞シは、終助詞ヨとも、終助詞的に用いられる接続助詞カラとも、置き換えることができる。本論文で対象にしている文末詞シも、もともとは理由をあらわす終助詞であり、その本来の役割が薄れてしまった接続助詞なのではないだろうか。

2004 (平成 16) 年入学

1LT04064Y 言語学専攻 島本明子

2008 (平成 20) 年 1 月 10 日提出

<目次>

1.	はじめに	1
2.	シが用いられる文法的な条件	2
2.1.	形 2	
2.1.1.	許容される例	2
2.1.2.	許容されない例	3
2.1.3.	まとめ	4
2.2.	時制	4
2.2.1.	許容される例	4
2.2.2.	まとめ	5
3.	シが用いられる文脈的な条件	6
3.1.	相手の発言を否定する文脈で用いられるシ	6
3.1.1.	平叙文	6
3.1.2.	疑問文	7
3.2.	聞き手・話し手のもつ認識と感情に観点を置く	8
3.2.1.	主たるシの性質	8
3.2.2.	感情の強弱とシの適用範囲の変化	11
3.2.3.	まとめ	13
4.	シと同じはたらきをもつもの	15
4.1.	終助詞ヨとの比較	15
4.2.	接続助詞カラの終助詞的な用法との比較	16
5.	シの由来	17
6.	結論	18
	参考文献	19

1. はじめに

特に若者の会話の中にみられる表現に、次のようなものがある。

- (1) A: 「このケーキ不味いよね」
B: 「美味しいし！」
- (2) A: 「これ知ってる？」
B: 「知らんし！」

この、Bの発話の末のシは、一体何なのだろうか。著者の言語感覚では、上の例文(1)、(2)のように、「～し！」と、感嘆符とともに用いられるイメージが強いのだが、シは婉曲表現だとする声も聞かれる。本論文では、この文末詞シがどのような意味役割をもち、どのように用いられるのか、その用法を考察していく。

2. シが用いられる文法的な条件

シを用いるためには、どのような条件を満たすことが必要なのだろうか。シが実際、日常会話の中で、どのように用いられているかをみていく。

2.1. 形

シは、どのような形の文にも無条件に付加できるわけではない。どのような構文であればシを付加することができるのか、例を挙げて考察していく。

2.1.1. 許容される例

シは、文の末尾が以下のような形であれば、付加することができる。

<形容詞の終止形+「し」>

(3) A:「このケーキ不味いよね」

B:「美味しいし！」

(4) A:「私ってかわいくないよね...」

B:「かわいいし！」

<名詞+助詞「だ」(方言では「や」)+「し」>

(5) A:「あれって猫だよな？」

B:「犬やし！」

(6) A:「今何してるの？」

B:「勉強やし！」

<形容動詞の終止形+「し」>

(7) A:「部屋汚いんじゃない？」

B:「きれいやし！」

(8) A:「これ、私がもらってもいい？」

B:「だめやし！」

<動詞の終止形+「し」>

(9) A:「今日来ないんでしょ？」

B:「行くし！」

(10) A:「今日くるの？」

B:「行くし！」

<否定「～ない」(方言では「ん」)+「し」>

(11) A:「今日来るよね？」

B:「行かんし！」

(12) A:「あのひとかっこよくない？」

B:「ぜんぜんかっこよくないし！」

<希望「～たい」+「し」>

(13) A:「あのケーキ屋さん、別に興味ないでしょ？」

B:「そんなことないし！行きたいし！」

(14) A:「明日あのケーキ屋さんに行くんだよ」

B:「いいなあ！私も行きたいし！」

<過去形+「し」>

(15) A:「映画おもしろかったね！」

B:「つまらんやつたし！」

(16) A:「昨日学校行かなかったの？」

B:「行つたし！」

2.1.2. 許容されない例

前節で挙げた以外の構文には、シを付加することはできない。シを付加することができない構文の例を、いくつか挙げる。

<勧誘・意思「～よう」+「し」>

(17) A:「私、明日の飲み会は行かないの」

B:「*どうして？一緒に行こうし」

(18) A:「これは明日食べようよ」
B:「*今夜食べようし」

< 禁止「～な」+「し」>

(19) 「*寝るなし」

(20) 「*さぼるなし」

< 推量「だろう」(方言では「やろう」)+「し」>

(21) A:「この空模様だと、雨が降りそうだね」
B:「*降らんやろうし」

(22) A:「あの子、今日は来ないんだろうね」
B:「*来るやろうし」

2.1.3. まとめ

シを付加することができるのは、形容詞の終止形、名詞+助詞「だ」(方言では「や」)、形容動詞の終止形、動詞の終止形、否定「～ない」(方言では「ん」)、希望「～たい」、過去形+「し」の後ろである。後ろにシを付加することができない例としては、勧誘・意思「～よう」、禁止「～な」、推量「だろう」(方言では「やろう」)などがある。

2.2. 時制

2.1 節の最後で【過去形+「し」】という使い方にもふれたが、シは、どのような時制で用いることができるのだろうか。シが使用できる場面が、時制によって制限を受けるのかどうかを見ていく。

2.2.1. 許容される例

< 過去 >

(23) A:「ちゃんとご飯食べたの？」
B:「食べたし！」

(24) A:「昨日のデートどうだった？」
B:「ぜんぜん楽しくなかったし！」

< 未来 >

(25) A:「夕方雨降るんだってよ」
B:「絶対降らんし」

(26) A:「明日は学校休んじゃだめだよ」
B:「言われんでもちゃんと行くし！」

< 進行形 >

(27) A:「ちゃんと勉強してるの？」
B:「しよるし！」

(28) A:「私そんなこと言ってないよ！」
B:「言いよったし！」

2.2.2. まとめ

シは、時制によって制限を受けることはなく、会話の内容の時制がどのようなものであっても用いることができる。

3. シが用いられる文脈的な条件

これまででは、シを付加することが許容されるための、文法的な条件について考えてきた。本節では、シが、どのような文脈で、どのような意味を持って使われるのか、シを用いるための文脈的な条件を考察していく。

3.1. 相手の発言を否定する文脈で用いられるシ

3.1.1. 平叙文

まず、平叙文を見ていく。

- (1) A:「このケーキ不味いよね」
B:「美味しいし！」
- (3) A:「私ってかわいくないよね...」
B:「かわいいし！」
- (15) A:「映画おもしろかったね！」
B:「つまらんやったし！」
- (25) A:「夕方雨降るんだってよ」
B:「絶対降らんし」

以上のような例から、シは、相手の発言内容を否定する文脈において用いられるものなのではないかと考えられる。よく似た二つの例文を比較してみる。

- (1) A:「このケーキ不味いよね」
B:「*うん、不味いし！」
- (1'') A:「このケーキ不味いよね」
B:「めちゃくちゃ不味いし！」

Bの二つの例文は、ともにAの発言を肯定しているように見えるが、(1')には強い違和感を感じるのに対し、(1'')はすんなりと受け入れられる。両者の差は、(1')がAの発言を肯定しそのまま繰り返しているのに対し、(1'')は、同じ「不味い」という返事でも、「とてもじ

ゃないが食べられない、不味いなんてものじゃない」という気持ちを表し、Aの単に「不味い」という表現をより強めて訂正している、というところにある。「不味い」を「美味しい」と言うほどではないが、やはり(1'')はAの発言を否定しているために、許容されると考えられる。

3.1.2. 疑問文

次に、疑問文を見てみる。

- (5) A:「あれって猫だよな？」
B:「犬やし！」
- (7) A:「部屋汚いんじゃない？」
B:「きれいやし！」
- (9) A:「今日来ないんでしょう？」
B:「行くし！」

これらは、質問に対し、質問をしているAの考えとは違う答えをBが返しているため、やはりBはAの発言を否定していると言え、先の仮説にあてはまる。

では、次のような例文はどうだろうか。

- (27) A:「ちゃんと勉強してるの？」
B:「しよるし！」

(27)では、Bは、Aの「勉強しているのか」という問いに対し、「勉強している」という肯定的な返事をしており、先の仮説に反するシの使用例であるかのように見える。しかしこの場合、AはBに、単に「勉強しているのかどうか」を尋ねたわけではない。文頭に「ちゃんと」とつけているところから、Aは、「Bは今勉強をしているはずだ」という情報をあらかじめ持っており、しかし本当に勉強をしているのかどうかを疑って、Bに尋ねたのだと考えられる。Bは、Aは自分が勉強をしていることを知っているはずなのに、「ちゃんと勉強しているのか」と確認に来たことに腹を立てているのだ。よって、相手の発した言葉の裏に込められた、「Bはちゃんと勉強していないのではないか」というAの思考を否定していると言える。

細かく状況を設定してみる。

(29) B:「今日の分の勉強は終わったから、遊びに行くね」
 A:「ほんとにちゃんと勉強してるの？」
 B:「しよるし！」

(30) B:「今から勉強するよ」
 (しばらくして、AがBの様子を見に行き)
 A:「ちゃんと勉強してるの？」
 B:「しよるし！」

(31) B:「ぜんぜん勉強してないけど、今日は遊ぶ！」
 A:「*ちゃんと勉強してるの？」

(29),(30),(31)を見てわかるように、最初からBが勉強をしていないことがわかっていれば、「ちゃんと勉強してるの？」と尋ねることはできない。

3.2. 聞き手・話し手のもつ認識と感情に観点を置く

3.2.1. 主たるシの性質

3.1.2 節の最後で、「Bが勉強していることを、Aは知っていた」ということに着目した。本節ではまたいくつかの例文を見ながら、「聞き手と話し手の持つ、会話の中で扱う事柄についての認識」という点に焦点を当てて、シの意味機能を考えていく。

(32) (初対面のAとBが会話をしている)
 A:「猫は好き？」
 B:「?嫌いやし」

(32') (初対面のAとBが会話をしている)
 A:「ゴキブリは好き？」
 B:「嫌いやし！」

(32)では、AとBは初対面で、まだお互いのことを何も知らない。当然、AはBが猫を好きかどうかはわからず、またBも、Aは自分が猫が嫌いだと知らないとかわっている。このような状況で、Aの問いに対し「嫌いやし」とシを用いて答えると違和感がある。次に、(32')を見てみる。(32)と違うのは、好きかどうかをたずねるものが猫からゴキブリに変わったことだけである。だが、この場合、Bは「嫌いやし」と返事をする事ができる。猫

とゴキブリの違いは、猫は、嫌いなひともしいるだろうが猫が好きなのも多くいて、ゴキブリは、一にはそれを嫌うひとが大多数を占めるという点だ。よって(32)の問いは、はじめから「嫌いだ」という返事が予測されるものだと考えられ、Bとしては「嫌いに決まっているんじゃないか、どうしてそんなことを聞くのか」という気持ちがあるために、「嫌いやし！」という答え方をすることができるのである。(32)では、Bの返事として、「嫌い」というのは自然だが、(32')では、前後の文脈があれば別だが、唐突に「ゴキブリは好き？」と聞かれて単に「嫌い」とだけ答えるほうが不自然かもしれない。)

しかし、(32)のシも、ある状況を設定すれば許容されるようになる。Bが、猫のことをとても強く嫌っていて、猫についての話題を振られたくないほどの嫌悪感を持っている、という場合である。

以上のことから、シは、単なる否定に使われるものではないと考えられる。ある事柄について会話をしているとき、シを使うことができる条件を整理する。シを使うためには、3つのポイントがあり、一つ目は、その事柄に関して聞き手と話し手の持っている情報が一致している、と話し手が認識していることかどうか、二つ目は、実際の聞き手の言動が、その情報にそったものであるかどうか、三つ目は、話し手が、聞き手に対して、不満や苛立ちを持っているかどうかである。その三つの組み合わせにより、シを用いることができるかどうかが決まると考える(表1)。

				シが使えるか
a	+	+	-	×
b	+	-	+	
c	-	+	-	×
d	-	-	+	
e	-	-	-	×

(表1)

事柄に関して、話し手と聞き手の持つ情報が一致している、と話し手が考えている(+)、いない(-)
 実際の聞き手の言動が、話し手の持つ情報、認識にそっている(+)、いない(-)
 話し手が聞き手に対し、不満や苛立ちなどのマイナスの感情を持っている(+)、いない(-)

のプラスとマイナスの組み合わせは、正確には8通りあるはずである。だが、ともにプラスであるとき、つまり、話し手と聞き手の認識が一致しているとき、話し手

が聞き手に対しマイナスの感情を抱くことは考えられないので、は自動的にマイナスとなる。がプラスでがマイナスであるとき、マイナスの感情に強弱はあれど、は自動的にプラスになる。がマイナス、がプラスのとき、聞き手は、話し手が、聞き手は知らないと思っている情報を実は知っているということなので、そこでは負の感情よりも、驚きなどが先行するだろうと考えられるので、マイナスとなる。

この表から考えると、シを使うことができる状況は、b.会話中に扱う事柄に関する聞き手と話し手の持つ情報が一致している、と、話し手は考えているが、実際の聞き手の言動はその認識にそうものではなく、話し手が聞き手に対しマイナスの感情を抱いているときと、d.聞き手は会話中に扱う事柄に関する情報を持っていない、と話し手が考えており、実際に、聞き手は話し手より少ない情報にもとづいた言動をとり、話し手が聞き手に対してマイナスの感情を抱くとき、の2種類である。d.の状況の具体例としては、聞き手が知らず知らずのうちに、話し手がふれられたくないと思っている話題にふれてしまい、話し手が嫌悪感や苛立ちを感じてしまったとき、聞き手が独断や誤った情報により話し手の状況を予測する際に、話し手自身の認識とは異なる評価を与えられたり、都合の悪い予測をされたりし、話し手がマイナスの感情を抱いたときである。

そうすると、シを使う際、相手の発言自体を、言葉で否定している必要はないことになり、次のような用例が許容されることにも筋が通る。

(33) (もう何度も同じことをBにたずねているにもかかわらず)

A:「ねえねえ、今日の飲み会行く？」

B:「行くし!!」

シが否定にしか使えないとすれば、これは(1')と同じように、相手の発話を単純に肯定した、誤ったシの使い方である。だが、括弧中の「もう何度も同じことをBに尋ねているという条件が加われば、先の、シが使われる状況b.に該当する。Aが、Bが飲み会にくることはわかっているながらふざけていたとしたなら、お互いの認識は一致しているにもかかわらず、知らんふりをして同じことを聞いてくるAへの嫌悪感や苛立ちを、Bが来るのかどうかを本当に忘れてしまっていたのだとしたら、飲み会に出席することを何度もAに伝えており、互いの認識は一致しているつもりだったBのAへの、半ば呆れた驚きや不満を、シは表している。

(7) A:「部屋汚いんじゃない？」

B:「きれいやし!」

(7)では、Aが実際にBの部屋がきれいであることを知っているのに、Bをからかって言って

いるならば、「Bの部屋が汚いかどうか」という事柄について、AとBは同じ認識を持っているにもかかわらず、それに反するようなことを言うAへの不満を、シは表している。Aが、Bの部屋の状態についての情報は持っていないのに、自分の予想で「汚いのではないか」と言っているのであれば、それは表1のd.の状況で、自分への低い評価に対するBの不満を、シは表している。

ふれられたくない事柄にふれられた苛立ちを示すシの例を以下に挙げる。(34)では、喜ばしくない出来事について、(35)では、後ろめたい、人に知られられなかった事柄についてふれられたことによる苛立ちを、シを用いて表現している。また(36)では、勉強しているところをAに見られられなかったのかもしれないが、Bは勉強の邪魔をされられなかったのだという解釈も可能である。

(34) A:「最近彼氏とうまくいってる？」

B:「先週別れたし」

(35) A:「この花瓶を割ったのは誰？」

B:「私やし!」

(36) A:「ねえねえ、何やってるの？」

B:「勉強やし!」

3.2.2.感情の強弱とシの適用範囲の変化

もうひとつ例を見てみる。

(37) (冷蔵庫にケーキが入っているのを見つけて)

A:「あっ、ケーキだ!このケーキ食べていいの？」

B:「?ダメやし!」

(37) (そのケーキが来客用であることがわかっていて)

A:「ねえ、ケーキ食べていい？」

B:「ダメやし!」

(37)では、Aはケーキを食べていいのかわかるとは知らず、Bもそれをわかっており、このような会話ではじめから「ダメやし!」としかるのは不自然である。「それはお客様用だから」などと、理由を説明するのが普通ではないだろうか。ふれられたくない事柄にふれられたり、何らかの評価をされたりしたということでもないので、ここではシを付加した表

現は許容されづらい。それに比べて(37)では、Aはケーキを食べてはいけないという情報を一度得たうえで、「やっぱりケーキが食べたい。食べてもいい？」と聞いている。この問いに対しては、「そのケーキは来客用だから、食べちゃダメって言ったでしょ」という気持ちを込め、シを用いて返事をする事ができる。ここまでは今までの考えに適っている。では、(37')はどうだろうか。

(37') A:「あっ、ケーキだ！いただきまーす！」
(ケーキを見つけたAが、今にもケーキを食べようとしているのを見て)
B:「あー！それ食べちゃだめやしー！！」

この場合、(37)と同じように、Aがケーキを食べてはいけないと知らないことをBもわかっているため、シは使えないはずだが、(37')では、「慌てている」という状況が、シの許容度を上げているように思われる。今までの例を振り返ると、相手に対する反発、否定の気持ちが強い用例が多い。

(1'') A:「このケーキ不味いよね」
B:「?別にふつうやし」

この例文でBは、確かにAの「不味い」という評価を否定し「ふつうだ」と言っているが、逆に美味しいと言ったり、とても不味いことを主張したりするときほどの、強い気持ちを持って反発しているわけではないために、シの許容度が下がっているように思われる。(33)でも、BがAをそれほど鬱陶しいと思っていなければ、「行くし！」という表現にはならないだろう。

シは、単に事実を述べたり、何かを否定したりするだけでなく、そこに話者の感情 相手や状況への不満、嫌悪感 を表す作用を持っており、話者の感情が強い場合には、シを用いることができる許容範囲が広がっているように感じる。

感情の動きはあるものの、聞き手・話し手のもつ認識はあまり考えていないシの使用例として、ひとり言を言うときがある。例を見てみる。

(38) (屋外に出て)
「寒いし！！」

¹ ただしBが、「不味くもなく美味しくもなく、ふつうだ」ということをほんとうに強く主張したいのなら、(1'')も許容される。

(39) (ドアに足をぶつけて)
「痛いし！」

これらは、単純に現在の状況への不満を口に出しているだけである。聞き手は最初からいないため、聞き手と話し手の持つ認識などにはもちろん無関係である。相手に働きかけるという性質も弱いので、今まで見てきた使い方とは別に、単に「マイナスの感情の吐露」だと言えそうである²。

逆に、不満の気持ちがそれほどなくても、シを使うことができる場合もある。それは相手や状況に、「つつこみ」を入れるときだ。

(40) (友人の靴下が左右不ぞろいであることに気づいて、笑いながら)
「靴下左右違うし」

(40)では、話者は友人が靴下を間違っていることに対して、特に不満を持っているというわけではない。ただ、「左右で違う靴下をはいている」ということが、ふつうあまり起こりえないことだと話者が思っている、ということが予想される。例えば肩に、本人が気がつかなくても何ら不自然ではないような、小さな糸くずがついているときは、「糸くずついたらし」とはあまり言わない。それは日常でごくふつうに見かけることだからである。しかし、靴下を間違えてはいてしまうことは、なかなか見かけない。その間違いをおかしてしまった友人に対し、話者は、不満とまではいかないまでも、「それはないでしょう」という気持ちを多少なりとも持っていると考えられる。そこで、自分の認識をあらためて相手に伝える作用をもつシを用いて、友人に「つつこみ」を入れているのだ。

3.2.3.まとめ

以上の議論をまとめておく。

(41) シを使うことができるのは、会話中に扱う事柄に関する聞き手と話し手の持つ情報が一致している、と、話し手は考えているが、実際の聞き手の言動はその認識にそうものではなく、話し手が聞き手に対しマイナスの感情を抱いているときと、聞き手は会話中に扱う事柄に関する情報を持っていない、と話し手が考えており、実際に、聞き手は話し手より少ない情報にもとづいた言動をとり、話し手が聞き手に対してマイナスの感情を抱くときの2種類である。
ひとり言につかわれるシは、相手に対して働きかける性質はもたず、単なるマイ

² 話者の感情が高ぶっているときは、(38)は空に、(39)ではドアに向かって、それぞれ文句を言っている、とすることもできる。

ナスの感情の吐露を表す。

4. シと同じはたらきをもつもの

これまで、実際のシの使用例、シが使える場合と使えない場合を見てきた。ここからは、シと同じような働きをもつと思われるものとの比較を通して、シの特性を探っていく。

それぞれの例文ごとに見ていけば、シに置き換えが可能なものは多くある。例えば例文(1)のシは、「やん(じゃん)」「じゃない」に置き換えても、文の意味は変わらない。が、これらは例文(2)や(8)には対応できない。幅広くシに置き換えることができるのが、終助詞ヨと、終助詞的な使い方をされる接続助詞カラである。

4.1. 終助詞ヨとの比較

シを、終助詞ヨに置き換えてみる。

(2) A: 「これ知ってる？」

B: 「知らないよ！」

(3) A: 「私ってかわいくないよね…」

B: 「かわいいよ！」

(5) A: 「あれって猫だよね？」

B: 「犬だよ！」

(7) A: 「部屋汚いんじゃない？」

B: 「きれいだよ！」

シをヨに置き換えても、文としては何の違和感もないが、アクセントの調子によっては、文の意味が変わってしまう。シを使うかヨを使うかで、文の意味が変わらないようにするためには、ヨは非上昇調で発話される必要がある。ヨが上昇調で発話されると、聞き手・話し手の認識の状態が変わってきてしまうのだ。シまたは非上昇調のヨを用いると、「話者は会話の中で扱う事柄についての聞き手と話し手の認識は一致していると思っている」という解釈も可能だが、上昇調のヨだと、話し手は聞き手がはじめから知らなかった情報を新たに教えている、という解釈しかとれない。シにはヨのように、複数のアクセントの可能性を持たないが、そのほうが使う側の負担が小さく、用いられやすいということはあるだろうか。

4.2. 接続助詞カラの終助詞的な用法との比較

シを、カラに置き換えてみる。

(2") A: 「これ知ってる？」

B: 「知らないから！」

(3") A: 「私ってかわいくないよね...」

B: 「かわいいから！」

(5") A: 「あれって猫だよな？」

B: 「犬だから！」

(7") A: 「部屋汚いんじゃない？」

B: 「きれいだから！」

ヨと同じく、カラも、シと入れ替えても、意味の変わらない文を作ることができる。しかし、カラを使うと、シを使ったときよりきつい印象を受ける。A に反論する隙を与えないような雰囲気である。文末のカラには、(42)、(43)のように、言語行動を終了させる働きもあるので、相手を拒絶する、遠ざけるようなニュアンスがあるのかもしれない。

(42) (その場を立ち去るときに)

「あなたには絶対負けないから！」

(43) (その場を立ち去るときに)

「もうお父さんとは口きかないから！」

シにはそこまでの強い働きはなく、むしろ、何もつけないときより語調をやわらかくしている印象を受ける。文末のシを、断定を避ける婉曲表現だと考える人がいるのもそのせいだろう。

5. シの由来

これまで、シの使われ方や、その意味機能を見てきたが、このシはいったいどこからやってきたのだろうか。その由来を、まず、次の二つに絞ってみた。

(44) 間投助詞シ

接続助詞シ

は、古語で「しぞ」「しも」などのように用いられる、強意の間投助詞である。シがしばしば強い感情をともなって用いられることから注目した。しかし、シは主に若者が使う言葉であるので、 のように、古語が由来であるとするのは無理があるだろう。 は、接続助詞カラが、シと似たような使い方をされることから取り上げた。カラ以外にも、文と文をつなぐという本来の形を離れ、文末で終助詞的に用いられる接続助詞は多くあり、古語にもそのような性質をもつものがある³。しも、もとは接続助詞として、文と文をつなぐ役割であったものが、終助詞的に用いられるようになってきたのではないかと考えられる。そして、他の多くの接続助詞がそうであるように、本来の「理由を表す」という性質が薄れてしまったのではないだろうか。

³ 文語でも、終助詞のようにも用いられるとされる接続助詞の例として、理由をあらわす接続助詞ガネがある。

6. 結論

主に若者の、会話中にあらわれる文末詞シは、接続助詞シが終助詞的に用いられるようになったものであると考えたい。その意味機能は、「その会話の以前からある認識（聞き手の認識と話し手の認識は一致していると、話し手は思っている）が、会話の中で、相手と不一致であることに気づいた話し手が、あらためて自分の認識を聞き手に伝える際にはたらかけと、それにとまなうやや強い不満の気持ちを表す」というものである。その機能は、終助詞ヨ、同じく終助詞的な使われ方をする接続助詞カラの果たす機能に共通のものがあるが、アクセントにより文の意味が変わってしまうことがない点と、強い不満を示したとしても語調としてはきつくないという性質から、近年広く使われるようになってきたのではないかと考える。

参考文献

- 伊豆原英子 (2001) 「「ね」と「よ」再再考」, 『愛知学院大学教養部紀要』49(1), pp. 35-49.
- 金水敏・田窪行則 (2000) 「複数の心的領域による談話管理」, 坂原茂 編 『認知言語学の発展』, pp.251-280, ひつじ書房
- 曹 再京 (2000) 「終助詞「よ」の機能」『言語科学論集』4, 東北大学文学部, pp.1-12
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版
- 松岡みゆき (2003) 「談話場における終助詞ヨの機能」『ことばと文化 4』名古屋大学国際言語文化研究科, pp.53-69
- 三浦智子 (2007) 「文末のカラとその終助詞の用法」桜美林大学大学院修士卒業論文
- 道浦俊彦 「ことばのはなし 1184「おもしろかったしい」」, 『道浦俊彦の平成ことば事情』より (<http://www.ytv.co.jp/announce/kotoba/>)
- 『和歌入門附録 和歌のための文語文法』
(<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/intro/josi07.html#ab07>)